

エッセイ

コトバはファンタジー

ときありえ

ときありえ 児童文学作家。翻訳家。『のぞみとぞぞみちゃん』（理論社）で日本児童文学者協会新人賞。主な創作に『海の銀河』、翻訳に『ゆきのしたのなまえ』（いずれも講談社）ほか。

コトバって、つくづく不思議です。たとえば、家のガラス窓いっぱいに見えているイチヨウの木。

イチヨウ。いちよう。銀杏。どう書く（読む・聞く）にせよ、イチヨウというコトバと、目の前の緑は別ものです。なのに、イチヨウというコトバで、あの緑のものが表せて（現せて）しまう！

つまり、あの緑のものがもつ意味のすべてが、イチヨウというコトバに変換されているということでしょうが、これは奇跡ともいってべき大飛躍、ほとんど魔法、まさにファンタジーだと思ふのです。

ファンタジーとは、ギリシャ語のファンタスマ「存在しないものを存在させる意識の働き」からきているそうです。

『ハリポタ』から『指輪物語』『ナルニア』と、世はファンタジー・ブームですが、語源にてらせば、児童文学ではおなじみのこの手法の本質がよくわかります。

《……そのとき、ミコちゃんのママの頭によつきりツノがはえました。》

と、お話に書くとき、それはママの心に宿ったイライラやカードが、ツノとなって「存在せしめられた」のです。

あるいは、ママなんてきらい！ オニみたい！ というミコちゃんの気持ち、ママの

頭にツノをはやさせたのかもしれない。いずれにせよ、心のなかの無形のもものが、「ママのツノ」として、鮮やかにたち現れ（表れ）たというわけです。

まさにこれと同じことが、イチヨウというコトバを読む（書く・聞く）とき、起こるのではないか。その瞬間、コトバに変換された意味としてのイチヨウが、さつそうと立ち上がるのではないか。

三才になる孫のケントに、ナオおばさんが、食卓のリンゴをさしていました。

「これ、お肉よ。」

ケントくんは、にこっとして、

「ちがうよ、パンだよ！」

その後、リンゴは、紅茶、ミルクと、つきよび名がかわり、最後は、

「ヒコーキだよ。ぼりぼりたべるの！」

なんとという遊び心でしょう。目下のお気に入りのミニ飛行機。かじったら、なるほどそんな音がしそうです。

三才の子どもは、コトバがいかに、ファンタジーな代物か、ちゃんとわかっているのです。そればかりか、その抽象性を手だまにあって、もう遊んでいる！

コトバは奇跡です。が、三才にしてそのコトバを遊ぶヒトの子どもは、さらに驚嘆すべき存在ではないでしょうか。